二階から見下ろせる所で、毛唐の青年がクリケットの激烈な遊び方をしてゐた。
辨士席は何處だか解らないので新吉はウロ〳〵してゐた。
虎の毛のオーバーを着てゐるので、熱くて不可ない。新吉は逆上せ上つてゐた。
福田正夫が皮切りをやる事になつた。
彼の圖體は偉大だ。
トラウベルやベルハーレンの讃美をして、日本には詩人が居ない樣な事を云ふ。
新吉は傍聽席の後方から這入つて聞いてゐた。
アガンボジョー。
唸らざるを得なかつた。
次が佐野袈裟美の階級文藝だつた、野次が起つて脫線して立往生を遂げた。
巡査が十二三人溜つてゐた。
辯士席の椅子に新吉は腰を下ろして、加藤一夫が耳元へ口を持つて來て、
『君は此の次の次へ出て來れ』と囁いた時、顏をしかめて立つたり坐つたりした。